

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2022

「しなやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第6回 12/2 (金) 13:30～15:00 報告

世界に飛び立つ岐阜の飛行機

講師 アンドリュー・デュアー (本学教授) 於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

大正から第二次世界大戦を経て現在に至り岐阜県は日本の航空産業の中心的な存在になっています。各務原の重工業から岐阜市や美濃市の個人の活躍まで、岐阜県で生まれた飛行機は世界中に羽ばたいています。

全ての始まりは明治9年にあります。陸軍は大砲の射的場建設のための用地を探しており、岐阜県稲葉郡に広がる各務原台地を選びました。

各務原台地は水利が便利だが、水はけが良すぎるなど土質が悪く農耕地に不向きということで江戸期より集落がすでに大砲演習場として使われ、明治3年にも大砲の試射の実績がありました。

大正3年に、第一次世界大戦がヨーロッパで勃発しました。飛行機はすぐに兵力として導入され、戦況に大きく影響していました。それを見た日本の陸軍省は航空戦力を強化することを決めました。戦争で初めて飛行機が使われたのが、1911年頃です。日本が強い国になるには航空機が必要ということで飛行機の開発が始まりました。

飛行機を日本では初めて飛ばした日本人二宮忠八は陸軍の看護兵をやっていたが飛ぶことに興味がありました。聴診器の管や輪ゴムなどを使って模型飛行機を作り、これは軍に役立つと、長岡外史大佐に提案したが却下されました。

陸軍中央部はすでにあつた所澤陸軍飛行場に次いで、各務原陸軍演習場を飛行場として転用することを決めました。各務原はもう一つの利点がありました。伊吹山に守られ、穏やかな一定した風に恵まれています。

演習場周辺の用地を買収し、鶯沼や那加などの村人を動員して、飛行場の建設に取りかかりました。大勢の人が各務原に住むようになりました。大正6(1917)年6月16日、1,175,576坪(約400ha)の各務原陸軍飛行場が完成しました。当時は草原から離陸着陸していたため、今のような整地された滑走路ではありませんでした。そして飛行学校も隣接されました。

大正5年に、川崎造船の松方社長は欧米の造船、自動車、飛行機などの産業動向を視察するために海外に遠征しました。自動車と飛行機の将来性を強く感じたので、自動車科と飛行機科を設置し、制作の準備にかかりました。

飛行機を作る為には、神戸の本社近くでない飛行場が必要でした。陸軍各務原飛行場の隣接地に飛行機組み立て工場を作りました。川崎航空機の原点です。

川崎造船の飛行機科の最初の仕事は、フランスのサルムソン2A2機をベースに陸軍乙型

一型偵察機という国産機を作ることでした。当時、フランスの航空技術は世界最先端でしたので、60人のフランス空軍将校団を呼んで、航空技術の導入教育を始めました。

三菱重工業も各務原飛行場と深い関係がありました。その頃三菱の工場は名古屋の海岸にありました。飛行機を作り始めた当初は300メートルの滑走路がありましたが、飛行機が進歩することにつれて、長さが足りなくなり、限界に来ていました。

戦後の小牧空港の建設まで、三菱の試作機は汽車で岐阜駅まで、そして牛車で中山道をたどって各務原飛行場まで運ばれていました。

現在は岐阜基地の空港の隣に、岐阜かかみがはら航空宇宙博物館があります。軍用機はもちろん、世界で一機しかない実験機など、大変珍しい飛行機がたくさん展示されています。

さらに岐阜県は模型飛行機でも有名です。岐阜市の江崎模型、美濃市にあるYoshida模型、各務原市にあるファルセット社は大活躍しています。

江崎模型は江崎ティッシュという優れた模型飛行機用の和紙のため世界中で有名な飛行機模型店です。美濃市にあるYoshida模型は二宮忠八の模型を作りやすく再現して売っています。各務原市にあるファルセット社は、日本のお城のペーパークラフトキットなどのほかに、紙飛行機のキットもたくさん制作しています。

講師の作った紙飛行機の制作本が主にアメリカで出版されているので、日本の紙飛行機はこの各務原から世界へと羽ばたいていると言えます。

飛行機が作られるようになった歴史やエピソードなどを、飛行機や飛行場、飛行機製作工場などの貴重な写真と共に紹介され、講師の飛行機に対する知識の豊富さやその情熱が伝わりました。地元である各務原が日本の航空産業の発展に大きく貢献してきたことをお話され、地元各務原を大変誇らしく思え、受講者にとっても大変有意義な時間になったと感じました。

・質問

「アメリカでも日本の子どもが遊ぶような模型飛行機で遊んでいるのか？」

・回答

「アメリカでも子どもの頃は紙の模型飛行機で遊んでいたが、現在はあまり手に入らないようである。日本でも今はドローンや既製品の紙飛行機のおもちゃが多い。」

・受講者からの意見

「今の子どもたちにも、自分で作った飛行機が飛ぶ達成感や、どうやったら高く、遠く飛ばせばいいだろうか、と試行錯誤する機会があるとよいと感じた。」

【講座の様子】

